



学生からのメッセージ

再出発

坂田 凜太郎 (福岡歯科大学 第4学年)

僕が大学に入学した年の夏、父が亡くなりました。父は僕が幼い頃から大学の空手道部で監督をしており、そのつながりで僕も入学すると同時に空手道部に所属することになりました。当時の空手道部は諸事情により部員が僕だけという状況で、存続の危機にありました。「空手道部を再建してほしい」という父の言葉に応えたい反面、僕自身としては、幼少から高校までずっと空手をしてきたことと、部員がたくさんいる部活に所属してきたというギャップとで「もう空手はしたくない、再建は無理だ」という気持ちで正直ありました。それから二年間、デントルで個人二連覇という成績を残したものの、他の部活で楽しそうにしている同級生がうらやましくもありました。



しかし三年生になる頃、同級生の一人が「空手をやってみよう」と言ってくれました。それがきっかけとなって部員が増えはじめ、今では計14名となり、みんなで汗を流して練習をしたり、部活でのイベントごとを楽しんだり充実した日々を送っています。また今年のデントルは団体戦男女共入賞という好成績を残すことができました。

今の空手道部があるのは、今まで部を守つてくださった歴代のOBの先輩方、顧問の先生、そして一人では何もできなかった僕に力を貸してきてくれる部員みんなのおかげです。本当に感謝しています。これから先も空手道部がさらに活躍できるように、また部員たちが空手道部で良かったなと思ってくれるような部活作りをしていきたいと思っています。

保護者からのメッセージ

『信じる力』をメッセージにのせて

拝形 幸司 (父兄後援会評議員 福岡県中央支部支部長)

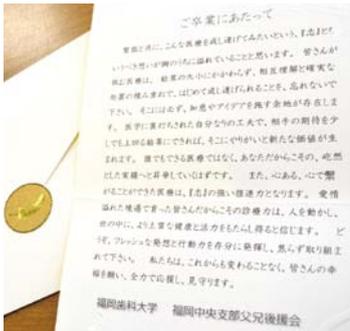
世に愁思渦巻くなか、人は、境遇は選べませんが、立つべき地、生き方を選ぶことになりました。今、学生は、独り立ちの大切な瞬間にいます。本人の力と運が試されています。親として出来る事と言えは、子に向かい合い、サポートしてやることのみです。とはいえ、二人の大人に對してできることは、限られています。親は、手出しは出来ません。しかし我々は、『いつも信じてやる』力を持っています。いくつになっても、享受出来れば、元気になる『力』だと信じます。



ときに親は、自らの胸襟を開き、人生を語ることも必要でしょう。勉学の事、趣味の事、人との出逢いや別れの事…。大切な事は、その時経験したさまざまな哀しみや辛さから、どう学ぼうとし、前を向いたかを、子に感じてもらうことだと考えます。

スイスの哲学者カール・ヒルティも、「人生には階段がある、しかも価値ある人生は、けつして平坦ではない」と説き、人生に価値を見出す人は、失敗から学ぶ人だと述べています。

福岡県中央支部父兄後援会では、日頃の活動を、その為の貴重な機会として捉え、近年、卒業生にメッセージカードを製作し、アドバイスの発信をおこなっております。ここに、本支部卒業生に贈ったものを皆さんに紹介いたします。



平成27年度卒業生に贈ったメッセージカード

New Sophia コラム

「無用の用」

先日、倫理学専攻の学生さんから学生時代に読んだ本でもっとも印象に残っているのは何かと尋ねられました。ドストエフスキーが衝撃的でその後の人生を左右したとある先生が口にしたのがきっかけです。別の先生が挙げたのはエックハルト説教集でした。エックハルトは西欧中世のキリスト教神秘思想家で、その先生は文学部ではなく医学部、しかもキリスト教徒でもないのに、正直言って驚きました。熟考する間もなく私の番です。とっさにポエティウス「哲学の慰め」に答えていました。ローマ最後の哲学者ポエティウスの前に人の姿をした哲学が現れ(慰めというより)叱責と論駁を行うという内容です。不幸を嘆く彼に哲学は富や名声など俗世の善が無価値であると論証してみせます。この本を読んだ頃の私は何もかもがうまくいってしまつたくらいなので大した悩みではなかったはずですが、当時の私には大問題に思っていました。そんなときに読んで叱咤されたようなものですが、なぜか涙なしには読めませんでした。今、本学で学んでいる学生さんたちが三十年後に「学生のときに出会った一冊」を尋ねられたらなんと答えるでしょうか? そういう本に出会えているでしょうか? そういふきっかけを与えるのもわれわれ教師の務めだと思いを新たにする機会にもなりました。皆さまは学生時代の二冊として何をどんな書名をあげますか?

(永嶋哲也)